

ジャン・コクトーと「左翼の科学」

ー超古代文明、アトランティス、そして「空飛ぶ円盤」ー

松 田 和 之*

『定過去』ー未来の読者に向けて書かれた日記ー

ジャン・コクトー（1889-1963）が1951年7月16日から死の前日に当たる1963年10月10日までつけ続けた日記の刊行が始まったのは、詩人の没後二十年にあたる1983年のことであったが、それから三十年後の2013年を迎えてようやく、全8巻が出揃うこととなった。全巻完結にこれほどの年数を要した理由は、膨大な日記の分量だけでは説明がつかない。後世の編者に対する指示とも受け取れる日記中の言葉、例えば「読み返してみると（それは私の筆跡からして容易なことではないが）、細部に深入りし過ぎていることに気づかされる。日記は簡潔であってこそ活きたものとなる。いつの日かこれを解説してくれる人たちには、私が自分の孤独を紛らわせるために書いた数多くの無駄な行を削除してくれるよう、お願いしたい」（1962/10/23）¹⁾という作者自身の言葉が、誠実な編者たちの足枷になったがゆえの遅延であったとも考えられる。

たとえ備忘のためであったとしても、日記をつける者は多かれ少なかれ自分以外の読者の存在を意識しているものである。コクトーの場合も例外ではなかった。彼の日記が公刊を念頭に置いて書かれたものであることは、『定過去』 *Le Passé défini* という作者自身の発案による題名が用意されていた事実からも窺い知れるが、注目すべきは、「この日記は私が死ぬまで公刊されないため、思い切って真実を述べることができる」（1953/10/11）という指摘がなされている点である。文学や芸術の諸分野に関する話題はもとより、日々の暮らしの雑感から国内政治や世界情勢、さらには「空飛ぶ円盤」*«soucoupe volante»*、つまり今で言うところのUFO（フランス語ではOVNI）をはじめとするオカルト的な領域に至るまで、『定過去』の話題は止め処ない広がりを見せる。「確実な有価証券」を決して買うことのない冒険者であったコクトーといえども、アカデミー・フランセーズの会員としての立場では公言することが憚られたであろう見解が、そこでは忌憚なく語られている。それができたのは、『定過去』が同時代の読者ではなく、まだ見ぬ未来の読者に向けて書かれたからにほかなるまい²⁾。

*福井大学教育・人文社会系部門総合グローバル領域

前衛考古学と「オーパーツ」

『定過去』で取り上げられた数々のオカルト的な話題の中でも、記述内容の質と量において「空飛ぶ円盤」と双壁を成すのが、いわゆる「前衛考古学」に関連するものである。太古の時代に現代文明をも凌ぐ高度な文明が存在していたことを世界各地に残された古文書や伝承を基に証明しようとする「前衛考古学」は、一般に疑似科学の一分野と見なされ、アカデミックな研究分野としては認知されていない。だが、こうしたオカルト的な歴史観がこれまで根強く支持されてきたこともまた事実であり、世界最古の文明とされる四大文明（メソポタミア文明、エジプト文明、インダス文明、黄河文明）³⁾よりも遥か昔に高度なテクノロジーを有する超古代文明が存在した証として、「その時代の文明にそぐわない古代の出土品。当時の技術では製作が不可能と考えられる加工品など⁴⁾」の存在がしばしば指摘されてきた。それらを総称する「オーパーツ」という言葉も、今ではすっかり市民権を得ている⁵⁾。

数ある「オーパーツ」の中でも特によく知られるもののひとつに、1929年にトルコの古都イスタンブールのトプカプ宮殿が所蔵する写本類の中から発見された「ピリ・レイスの地図」がある。羊皮紙に描かれた1513年製と1528年製の二枚の古地図は、紀元前のアレクサンダー大王の時代に製作されたものを含む28点の古海図・古地図を基に、オスマン帝国の海軍提督ピリ・レイスの手によって作成されたことがわかっているが、1513年製の地図の下端には、19世紀に発見され、1920年になって初めて地図化された南極大陸の、しかも驚くべきことに、氷に閉ざされて現在目にすることができない陸地の輪郭が、正確に描き込まれているという。本当にそれが南極大陸であるとすれば、この地図はまさに「オーパーツ」以外の何物でもあるまい⁶⁾。コクトーは没年の日記の中で、「オーパーツ」という言葉で形容される以前の「ピリ・レイスの地図」に言及している。「1550年にある私掠船の船長（ペリ・レイス）が作成した複数の地図が、1957年にイスタンブールで見つかっている。この航海家がそこに記載している山脈は1952年に発見されたものである。そして、グリーンランドがかつては三つの別個の島であったことを、彼は暴いてみせたのだった。」（1962/6/9）地図の製作者の名前のピリ（Piri）がペリ（Peri）と誤記されている上に、具体的に記されている年号等にも通説との齟齬が認められ、肝心の南極大陸に関しては一切言及がなされていない。グリーンランドが描かれている点からすると、コクトーがここで話題に取り上げているのは、1528年製の地図であったと考えられる。

「ピリ・レイスの地図」の存在が広く世に知られるようになるきっかけを作ったのは、アメリカの歴史学者チャールズ・ハプグッド（1904-1982）だった。謎の古地図に関する研究成果をまとめた彼の著書『古代の海の王たちの地図』*Maps of the Ancient Sea Kings*が、1966年に刊行されている⁷⁾。その後、1970年代に「ピリ・レイスの地図」の知名度を一気に高めたのが、スイスの実業家エーリヒ・フォン・デニケン（1935-）である。「オーパーツ」を太古の昔に宇宙人が地球に飛来して超古代文明を築いた証拠と捉える彼の著作は、世界中で多くの読者を獲得したのだった。また、ハプグッド以前に「ピリ・レイスの地図」を詳細に分析し、氷の下に横たわる南極大

陸の正確な輪郭を明らかにする最新の測量結果を踏まえて、そこに南極大陸が描かれている可能性を逸早く指摘した人物がいたことも、忘れてはならない。古地図に通じた元アメリカ海軍水路部の技術士官アーリントン・マレリー（1877-1968）である。年代を考慮すると、「ピリ・レイスの地図」に関するコクトーの知識は、1958年に発表されたマレリーの研究成果に負っている可能性が高いように思えるが、日記の中で言及されているのは1528年製の地図であり、南極大陸が描かれているとされる1513年製の地図ではなかった点に、何かしら釈然としないものを感じる。コクトーが何らかの未知の情報源を通じてこの「オーパーツ」の存在を知った可能性も、あながち否定できない。

さらに同日の日記には、「アンデス台地。私たちの時代の一万年。ティワナクの『太陽の門』」という断片的な言葉がメモのように書き留められているが、これもやはり「オーパーツ」に関連する記述であると考えられる。インカ帝国以前に栄えた古代文明を偲ばせるボリビアのティワナク（ティアワナコ）遺跡は2000年にユネスコの世界遺産に登録されているが、この石造遺構のシンボルのモニュメントとして知られるのが、幅4メートル×高さ3メートルの『太陽の門』である。10トンもの巨大な安山岩の一枚岩で構成され、しかも表面が高度に研磨されている点において、この建造物も「オーパーツ」の一種であると見なされてきた。明示的な言葉をひと言も伴わない「アンデス台地」«Plateau des Andes»という地名には当惑させられるが、「一万年」という年数はともかく、文脈からして、やはり「オーパーツ」の類が紹介されているものと考えべきだろう。地理的な整合性、そして知名度から察するに、コクトーがここで言わんとしたのは、「ナスカの地上絵」であったと思われる。遙か上空からでなければ識別し得ない巨大な地上絵の数々は、1939年以降、その存在が徐々に明らかになってきたが、誰が一体何の目的でどのようにして描いたのか、謎は尽きない。「ナスカの地上絵」もまた、1994年に世界遺産に登録されている。

「反重力」で飛翔する黄金の宇宙船

デニケンの古代宇宙飛行士説が喧伝される以前にコクトーが「オーパーツ」に関する知識を少なからず有していたことに驚かされるが、この日の日記（1962/6/9）には、さらに瞠目すべき記述が残されている。上述した痕跡としての「オーパーツ」と併記する形で、痕跡から窺えるテクノロジーとしての「オーパーツ」、具体的に言えば、「インカ人たち」や「インド人たち」の乗り物（宇宙船）に関するコクトーの持論が披露されているのである。南米で発見されたさまざまな「オーパーツ」に古代インカ人たちが「惑星間航行」を試みた形跡を認めた彼は、「反重力が発明されない限り、人間の探求は必ずや失敗に終わるだろう」と断じ、惑星間を航空機の原理で航行しようとする考え方自体が間違っていることを喝破した上で⁸⁾、「インド人たちは、黄金の盾の中で、金属の振動によって、静寂のうちに飛翔していた」と述べて、「反重力」を実現させた高度な文明が古代インドに存在していたことを暗に匂わせている。「黄金の盾」«bouclier d'or»は、旧

約聖書の『列王記』が伝える「ソロモンの黄金の盾」を連想させるが、「金属の波動」«vibration du métal»という言葉と考え合わせれば、「金」という金属に「反重力」を可能ならしめる特別な力が秘められていることを示唆する表現であるようにも受け取れる。それを裏付けるかのように、他日の日記には、「インカ人たちは黄金の大杯に乗って小旅行をしていた。それは彼らが鑄造したもので、その波動は落下を操るのに十分なものであったが、用いられた金は比重が大きかったために、剥離するおそれが、つまり、磁化現象によって球体に接着することができないおそれがあったに違いない」（1962/8/20）という、晦渋ながらも金属の特性に関する専門的かつオカルト的な知識を窺わせる記述が見受けられる⁹⁾。「落下を操る」«diriger la chute»という奇異な表現の意味を理解する上で、前年の日記に書き留められた「恐らく円盤は重力を欠いた世界からやって来ているのだろう。そこでは、離陸しようと、へその緒を切ろうと努める代わりに、地面にくっついているための努力が必要となる。飛翔することは、すなわち落下することなのである」（1961/2/5）という言葉が参考になるだろう。コクトーの言う「落下」«chute」とは、重力の作用を免れた「飛翔」«vol»を意味する表現であると考えてよい。

ここで注意したいのは、この興味深い記述が、古代のインカ人やインド人たちの乗り物に関するものではなく、「空飛ぶ円盤」、つまりUFOに関するものにほかならない点である。併せて、先の引用文が「円盤は、あまりに重い（同時に軽くもある）金属から成るため、諸惑星の引力に囚われることはないはずである」という文章の後に記されている点、そして、引用文中で、インカ人たちの乗り物が、「コロンビアの黄金ジェット（黄金シャトル）」などの南米産の「オーパーツ」に見られるジェット機やスペースシャトルの形状ではなく¹⁰⁾、大型のUFOを連想させる形状である「黄金の大杯」という言葉で表現されていた点にも留意したい。コクトーは、地球上にかつて存在したとされる超古代文明において使用されていた乗り物（宇宙船）と現代の謎であるUFOを、ともに「反重力」の作用に基づくテクノロジーを備えた飛翔体として、同等視していたのである。

反重力の作用を利用して飛翔するテクノロジーに関しては、古代インカよりも古代インドの方が進歩していたのではないか。そうしたコクトーの認識が、先に引用した日記の記述から読み取れるように思えるが、彼は他日の日記において、「インドの聖典（ヴェーダ）」を「我々の世界よりも遥かに進んでいたかつての世界に関する正確な資料」と見なし、そこには「空飛ぶ機械や宇宙船、核兵器、ミサイル、人工衛星、それに原子爆弾やレーダーが使用されたさまが描かれていること、それらが微に入り細を穿ち抒情や空想を交えることなく科学的に描かれていること」（1960/4/17）を指摘している¹¹⁾。ちなみに、ヒンドゥー教の聖典でもある二大叙事詩、『マハーバーラタ』と『ラーマヤナ』には、自由自在に空を駆ける神々の乗り物が登場する。俗に言う「ヴィマナ（ヴィマーナ）」である。もちろん、それを神話上の存在、つまりは空想の産物であるとするのが理性的で合理的な見方であろうが、前衛考古学の分野においては、「ヴィマナ」は一般に、超古代文明の高度なテクノロジーの証である「オーパーツ」の一種と見なされている¹²⁾。

出所にも成立年代にも不確かな点が多いが、サンスクリット語で書かれた『ヴィマナ・シャストラ』なる「ヴィマナ」の解説書も存在し、その「動力源は水銀で、鉄の容器内の制御された火によって熱せられると水銀から力が出て空を飛ぶ」仕組みになっていたことが、11世紀のインドの文献に記されているという¹³⁾。

興味深いことに、こうした指摘が最初になされたのは1985年であるとされているにもかかわらず、コクトーが「黄金の盾」に言及した1962年の日記には¹⁴⁾、この古代インドの謎の乗り物に関連して、「レーザーと水銀」という意味深長な言葉が記されている。二つの単語を並べただけの簡単な記述だが、「水銀」が「黄金の盾」の動力源として挙げられているのだとすれば、コクトーは現在唱えられている「ヴィマナ」水銀エンジン説を20年以上も先取りしていたことになる。「黄金の盾」と「ヴィマナ」が別物である可能性も否定できないが、古代インドの超常的な乗り物としての両者の共通点を考慮すれば、コクトーが「ヴィマナ」に言及する上で、あえて「黄金の盾」という旧約聖書に因んだ言葉を用いたと考える方が理に適っているように思える。それにしても、こうした特殊な知識を、彼は一体どこから入手したのだろうか。その情報源の特定が俟たれるところである。

「失われた大陸」と巨人族

超古代文明に関連して必ずと言ってよいほど頻繁に話題に上るのが、アトランティスやムー、レムリアなどの伝説上の大陸、俗に言う「失われた大陸」だが、コクトーがそれらにも通じていたことは、例えば、「思考の力が私たちの機械類に勝っていたそれらの大陸では、金が一般に使用される金属であり、私たちが鉄を使うように金が使われていた。宇宙空間を飛行する乗り物は、武器になりかねないため、廃止された。赤色人種である巨人族。私たちの世界は、海の底に眠る壮麗な世界の味気なく退廃した姿に過ぎない」（1962/9/23）という日記の記述からも窺える¹⁵⁾。「金」の使用への言及は、先に見た古代インドや古代インカの飛行船に関する記述とも整合するものであり、「反重力」を可能ならしめる金属として「金」を特別視するコクトーの見解は首尾一貫している。この日の日記で示された新奇な見解として注目されるのは、「失われた大陸」の住人が「赤色人種である巨人族」«*rares rouges et géantes*»であったとする奇抜な指摘がなされている点だろう¹⁶⁾。

「アトランティス」という言葉が、巨神アトラス（ギリシャ神話でオリンポスの神々との抗争に敗れ、永遠に天空を支え続ける苦役を課せられることになったティタン神族の勇士）の名前に由来することもあるが、アトランティス人が巨人であったとする説は根強いが、フランスにおいて、こうした視点からアトランティスを論じた先駆的な著作が、ドニ・ソーラ（1890-1958）の『アトランティスと巨人たちの統治』*L'Atlantide et le règne des géants*（1954）である¹⁷⁾。コクトーがこの「非常に面白い本」に読み耽ったこと、そして、その著者と交流を深めていったことが、同書が刊行された年の彼の日記（1954/8/15）から読み取れる。長らく大学で文学の教鞭を執って

いたソーラは、退職後、ニースのシミア地区に終の住処を構え、そこでアトランティス研究の成果を取りまとめたのだった。当時、ニース近郊のサン＝ジャン＝カップ＝フェラに生活の拠点を構えていたコクトーが彼と親交を結んだのは、必然の成り行きであったと言える¹⁸⁾。コクトーがアトランティスに関する知識の多くをソーラの著作に負っていたことは間違いない。

大西洋に存在したことが想定されることから、欧米では「失われた大陸」の中でもアトランティスの知名度が高いが、コクトーはムーにも言及している。奇想天外という点においては「赤色人種である巨人族」に勝るとも劣らない記述が、その前段落でなされていたのである。そこでは、「十字架の上で、キリストは、アトランティスと同様に海に沈んだ巨大な大陸の言語であったムー語で、自分の考えを述べた」という指摘に続き、さすがにムー語自体は使われていないが、その発話内容が具体的に紹介されている。何とも不可解な記述である。「ムー語」*«language mû»*を話すイエス・キリストはムー大陸の住人の末裔であったとでも言うのだろうか。確かに、コクトーはカトリックの教義の核心をなすイエスの贖罪の業を否定し、「すべての偉大な詩人たちの中で、最も酷い翻訳のされ方をし、最も誤解を受けているのが、キリストである」（1957/9/21）と述べるなど、イエス・キリストを救世主ではなく「偉大な詩人」として捉えていた。しかし、いくら「人間イエス」とはいえ、それをムーの種族の血脈に結び付ける発想には、過度な論理の飛躍が見られ、俄には信じ難いものがある。だが、イエス・キリストの真の出自が「失われた大陸」にあると考えたのは、実はコクトーだけではなかった。

コクトーは日記の中でアトランティス研究の旗手であったソーラの「宗教に関する学説」を紹介しているが、ムー語をしゃべるイエスの話にも増して耳を疑う内容に啞然とさせられる。ソーラによると、キリスト教の教理に特有の「自己犠牲、地獄下り、復活、昇天、それに聖体の秘跡までもが、昆虫の習性にも認められる」という。彼はそれを指摘した上で、キリスト教の秘儀が昆虫の生態に根差している理由を、かつて「巨大な人間たちが最後の巨大な昆虫たちと戦い、彼らの信仰を採り入れたからである」（1954/10/12）と説明したらしい¹⁹⁾。風刺が効いたB級のSF映画を思わせる設定はコミカルですらあるが、敬虔なキリスト教徒にとっては、笑って済まされる話ではない。巨人族と巨大昆虫族の戦いをコクトーがどこまで真に受けたのか、知る由もないが、カトリックの権威をものともしない痛快な指摘に彼が溜飲を下げたであろうことは想像に難くない。いずれにせよ、巨人族、つまり「失われた大陸」で人類よりも高度な文明を築いたとされる種族にキリスト教の起源を想定している点において、ソーラの見解はコクトーのそれと軌を一にしている。

コクトーが「失われた大陸」に関して見識を深める過程でソーラが果たした役割は、確かに大きかったに違いない。だが、ソーラの著作を手にとった時点で、すでにコクトーは、それを読み進めるための予備知識を十分に蓄えていたはずである。例えば、初めてソーラの研究に言及した日記（1954/8/15）の中で、彼は*L'Atlantide et le règne des géants*という書名を中性代名詞のyで受け、「そこでは、ヘルビガー、ペラミが直接光の下に姿を現す」と述べている。「ヘルビガー」

«Hoerbiger»とは、スチールプレートバルブの発明で知られるドイツのエンジニアで、天変地異説を裏付ける氷宇宙論を唱えたオカルト思想家でもあったハンス・ヘルビガー（1860-1931）、「ベラミ」«Bellamy»とは、ナチズムとの繋がりも噂されるヘルビガーの思想に傾倒したオーストリアの文筆家ハンス・シンドラー・ベラミ（1901-1982）のことである。氷の塊である月が崩壊を繰り返す度に、地球は天変地異に見舞われてきた。そのように考える前提として、彼らは宇宙が水素に満たされていることを主張したのだった。だが、恐らく化学の素養に欠けていたであろうコクトーは、「月が地球にぶつかる前に爆発する」と説くヘルビガーの仮説の因果関係に注目し、それを、「原子核の爆発が微粒子とぶつかる前に起こることがある」と述べて「因果律の破れ」を説いたドイツの理論物理学者ヴェルナー・ハイゼンベルク（1901-1976）の量子力学的な仮説になぞらえている（1954/8/21）²⁰⁾。コクトーは日記の中でハイゼンベルクの学説に対する関心と共感を再三にわたって表明しているが、晩年に彼が温めていた時間観が因果律に囚われないものであったことを思えば²¹⁾、至極当然と頷ける。

アトランティスとの関連で言えば、ヘルビガーもソーラと同様に、巨人族の存在を確信していたらしい。コクトーの日記には、彼が「円盤の中から出てきた人物たちを目撃した者の証言と巨人族に関するヘルビガーの学説との関連」をソーラに指摘したエピソードが記されているが、続く箇所では「巨大な乗り物と2メートルを超える人間の出現は非常に稀。直径10メートルの乗り物と1メートル20センチの人間の数知れない出現。巨人族の生き残りが今なお、円盤と呼び習わされる飛翔体を操縦する背の低い人間たちを統治する惑星があるのかも」（1954/10/12）というメモ書きのような記述がなされている。この「惑星」には、スウィフトが『ガリヴァー旅行記』*Gulliver's Travels*（1726）で描いた「フウイヌム国」を連想させるものがあるが、それはさておき、一連の日記の記述からは、コクトーが巨人族の存在を肯定的に捉えていたことが窺える。

加えて、ここで、またしても「空飛ぶ円盤」、UFOの話題が取り上げられている点に留意したい。この記述を補足する内容の文章が、他日の日記中に見受けられる。「『空飛ぶ円盤』と呼ばれる未確認物体は、いにしえのアトランティス人がすでに所有していた飛翔体であり、彼らは（限られた人数だったが）、地球の地軸が傾く前に、それを使って逃げ出すことができたと考えられる。」（1958/4/17）コクトーは、UFO現象をアトランティスと結び付けて解釈し、さらに、この「失われた大陸」が海の底に沈んだ原因を地軸の傾動に求めている。いわゆる「ポールシフト」である。斉一説（「過去の地質現象は、現在の自然現象と同じ作用で形成されたとする考え」）に相対してきた天変地異説（「天変地異によって地球上の生物はほとんど絶滅し、残ったものが地球上に広がることを繰り返したとする説」²²⁾）の系譜に連なる考え方がここで示されている点は、注目に値する。

ヴェリコフスキーの『衝突する宇宙』

前衛考古学においては、超古代文明やその揺籃の地とされる「失われた大陸」が亡びた原因として、しばしば二つの説が唱えられる。ひとつは古代核戦争説であり、先に見た日記（1960/4/17）の一節からも察せられるように、コクトーはその可能性を肯定的に捉えていたと見られる。そして、より有力視されるもうひとつの説が、天変地異説である²³⁾。ヘルビガーやベラミの学説も天変地異説の一種であると言えるが、その反響の大きさという点で、天変地異説を代表するものとして、やはりロシア出身の精神分析医イマヌエル・ヴェリコフスキー（1895-1979）の学説を挙げないわけにはゆかない。彼がニューヨークに定住したのちに発表された『衝突する宇宙』 *Worlds in Collision*（1950）は、「ダーウィンの『種の起源』またはニュートンの『原理』のように一時期を画するに至るかもしれないと一流批評家達を書き立て」た一方で、「こんな馬鹿馬鹿しいというよりも、人を誤るような有害無益な本などを出版するような会社のためには今後執筆したくないとの理由で、従来、マクミラン会社のために教科書を書いていた科学者の一部が、ボイコットする気配を示した」ため、同書を刊行したニューヨークの出版社がその出版権を他社に譲渡するなど、「賛否両論のごうごうたる声の中に、半年にわたりノン・フィクション部門において、ベストセラーの主位を占めたのであった。²⁴⁾」

ヴェリコフスキーが唱えた天変地異説は、その主著の題名が示すとおり、ダイナミックな宇宙の営みに立脚したものだった。世界各地に残された神話や伝説に描かれる大破局を現実の出来事と捉える点では、他の天変地異説と共通しているが、それを引き起こした要因に関して、「地球は約3500年前に彗星と至近距離ですれちがい」、その「直後に、大地震と火山爆発が各地で頻発した」こと、そして、地球に壊滅的打撃を与えた彗星が、実は金星であったことを、彼は独自に主張したのである。巨大な爆発で木星から分離した金星は、当初、彗星であったが、「ある時点で火星に近づきすぎて、彗星としての本来の軌道から逸れ」、「その結果、地球に大接近して聖書の大破局の原因となった」後、「太陽に近い現在の軌道に惑星として定着した」という²⁵⁾。

彗星であった金星が衝突寸前にまで急接近したことで、「地球の自転は遅れたか、あるいは一時的に止まってしまい、地軸は元の位相から外れて傾いた²⁶⁾」、つまり「ポールシフト」が起こった結果、地球は壊滅的な天変地異に見舞われ、各地の超古代文明が滅びることになった、とするヴェリコフスキーの学説は、上述したコクトーの見解とも相通じるものであった。『衝突する宇宙』のフランス語訳 *Mondes en collision* は、邦訳と同様に原典が出版された翌年の1951年に、パリの老舗出版社のストック社から刊行されているが、コクトーの日記に見られる「黙示録の大異変、そして中国やインドやエジプトの文献が詳述している大異変について、隕石であったり、本物の硫黄や本物の石油や本物のタールであったりした《奇蹟》の数々や地軸が変化する大地について、もし知識を持ちたいのであれば、イマヌエル・ヴェリコフスキーの本、つまりアンリ・モリセによって翻訳され、ストック社から出版された『衝突する宇宙』を読む必要がある」（1952/6/4）という記述は、まさにこの事実に関連したものである。

コクトーは翌日の日記の中で、「(ヴェリコフスキーの本)」という見出しに続けて、「原子はひとつの太陽系である。光子のエネルギーによって打撃を加えられた電子たちが一秒間に何回もひとつの軌道から別の軌道に飛び移るのに対して、(ヴェリコフスキーに言わせれば)太陽系は巨大であるため、同じ現象は10万年に一度しか起こらないことになる」(1952/6/5)と述べた上で²⁷⁾、『衝突する宇宙』の著者に物申すかのように、「ヴェリコフスキーは我々の太陽系の巨大さと原子構造の微小さについて語っているが、さまざまな大きさは我々との関係においてしか存在しないだけに、奇妙な話である。我々の太陽系はひとつの原子なのだ。原子は我々のものと似たひとつの太陽系であり、同様な関係はあまねく存在し、果てしが無い」という持論を展開している。彼がここで、ヴェリコフスキーの学説を敷衍しながら、時間と空間の遠近法を旨とする自らの世界観を開陳している点に留意したい。

エメ・ミシェルと「空飛ぶ円盤」

「オーパーツ」が物語る超古代文明、アトランティスやムーといった「失われた大陸」、そして、それらを短期間に破滅へと追いやった天変地異。さらにはコクトーにとって同時代の最大の謎とも言えるUFO現象に至るまで、彼が有した知識が生嚙りのものでなかったことは明らかであり、その情報源も単一であったとは考え難く、容易に特定できるとも思えない。だが、さまざまな情報源へと彼を導いたナビゲーター的な存在であれば、思い当たる節がある。先に見たコクトーの日記の「オーパーツ」に関する記述の中に、唐突に、まるでそれ自体が「オーパーツ」でもあるかのように、ある人物の名前が書き留められている。「エメ・ミシェル」(Aimé Michel)。先に引用した「インドの聖典(ヴェーダ)」に関する言及に引き続く箇所にも、やはり彼の名前が記され、同格のコンマのあとに、「そうした奇妙な事柄すべてに関して我々の時代で最も詳しい人物」(1960/4/17)という言葉が書き添えられていた。コクトーの日記に見られる超古代文明やUFOに関する記述の中で、「エメ・ミシェル」への言及がなされる頻度は、際立って高い。

エメ・ミシェル(1919-1992)はフランスにおけるUFO研究の草分けとして知られる人物であり、その主著のひとつである『神秘的な天空の物体』*Mystérieux Objets célestes* (1958)は、1981年に『UFOとその行動』という邦題で翻訳され、日本にも紹介されている。コクトーは、親交のあったこのサイエンスライターを「我々の時代で最も明晰な精神の持ち主」(1960/2/12)と称え、同書に関しては、「それは、人類の愚かさの記念碑と対峙する人類の知性の記念碑である。この本は、感じ取ってはいたけれど理解することができなかった事柄に関して、私の目を開かせてくれた」(1958/7/20)と述べて賛辞を惜しまなかった²⁸⁾。ミシェルのもうひとつの主著である『空飛ぶ円盤に関する基礎知識』*Lueurs sur les soucoupes volantes* (1954)には、コクトーの序文が冠せられている²⁹⁾。UFOに関する「問題をきちんと研究した唯一の人物、それがエメ・ミシェルであり、確かな証拠を発見した唯一の人物、それが私である」(1958/7/13)というコクトーの言葉からは、同志とも言える両者の関係が読み取れるが、それとともに、「二十の顔を持つ男」と呼ば

れた彼の、これまで最も等閑視されてきた「顔」、つまり UFO 研究者としての「顔」が浮かび上がってくる。

「二十の顔を持つ男」の面目躍如と言うべきか、『定過去』において取り上げられた話題は各方面に意外な広がりを見せ、読者を翻弄するが、中でも、刊行時にとりわけ驚きを以て受け止められたのが、数多くの「空飛ぶ円盤」に関する記述だった。この点において特に話題を呼んだのが1989年に出版された『定過去』の第3巻であったことは、そこに収められた日記が1954年のものであることを考えれば、合点がゆく。フランスにおける UFO 目撃史にあって1954年は特別な年だった。8月末より目撃談が急増し、「10月には、目撃談があまりに多いため、地方紙には毎日、少なくとも一件は円盤に関する記事が掲載され、それが数件に及ぶことも少なくなかった」という³⁰⁾。当時、コクトーが生活の拠点を置いていた南フランスでも UFO の目撃談が相次いだらしく、彼は「新聞では、円盤に関するものにしか興味が持てない」（1954/10/12）と打ち明け、連日のように、新聞に掲載された UFO やその搭乗者の目撃談を日記に書き留めている。では、現在に至るまでその謎が解明されていない UFO 現象を、コクトーは一体どのように理解していたのだろうか。

彼は UFO を「速度と静寂の乗り物」と形容し、「空飛ぶ円盤に乗っている人が我々を見る目は、当然のことながら、初期の大航海者たちが未開人たちを見た目と同じようなものだろう。だが彼らには、我々を殺戮したり教化したりする気はこれっぽっちもないようだ」（1954/4/21）と考えていた。法外な「速度と静寂」を可能にするものとして、「反重力」という考え方が日記の中で繰り返し説かれていることは、すでに見てきたとおりである。「空飛ぶ円盤に乗っている人」の正体については、「それら（円盤）は恐らく空間ではなく時間を旅しているのだろう。多分それらは、自らの過去を訪れる未来人の乗り物なのだろう」（1954/7/20）という、UFO をある種のタイムマシンと捉える穿った見方が示されている一方で、上述したように、その正体をアトランティス人（の末裔）やその配下の者たちに求める奇説も披露されている。コクトーがこの怪しくも深遠な謎を解く上でさまざまな可能性に思いを巡らせていたことが察せられるが、いずれにせよ、UFO を集団催眠による心的現象と捉える穏当な解釈を彼が一貫して退けている点は、特筆に値する。

ミシェルが唱えた代表的な UFO 理論に「オーソテニー」*«orthoténie»* があるが、その発想の源には、どうやらコクトーの示唆があったらしい。彼は「もし、それらの物体がある特定の線上を移動しているとすれば、もし、それらの航跡が何らかの絵になっているとすれば、その他、諸々の可能性があるのであれば、探究すべきだろう。例えば、それらの航跡が地球の磁力線と符合しているのかどうか、何らかの意味を持った別の航跡が存在するのかどうか、君にはわかるのではないか³¹⁾」と述べて、UFO 現象に対する認識を共有するミシェルの背中を押したのだった。「オーソテニー」とは、「まっすぐ張られた」という意味のギリシャ語に基づく造語であり、3箇所以上の UFO の目撃地点が同一直線上に位置づけられること、さらにはそうした直線が網目状に広がって

いることに着目し、UFO現象に規則性と法則性を認めようとする考え方である³²⁾。こうした造語の存在それ自体から、UFO現象に合理的な説明を加えるべく思案を巡らせたミシュルの、そしてコクトーの熱意が伝わってくるが、「しかし、私たちが引き合いに出されることは決してない」(1958/7/13)という日記の言葉どおり、UFO現象に対する彼らの知見が学界から受け入れられることは、ついぞなかった。

「左翼の科学」

当時の物理学会などに所属し、コクトーの言う「公の科学」«sciences officielles»に奉仕するアカデミックな学者たちの目には、ミシュルの存在はオカルト的な妄想に囚われた在野のアマチュア学者としか映らなかったに違いない。ミシュルだけではない。コクトーの日記からは、不遇をかこちながらも、UFO現象をはじめとする各種学会が無視を決め込んだ諸問題の解明に果敢に取り組んだ在野の若き研究者たちがいたこと、そして晩年の彼がそうした若者たちと積極的に交遊を結んだことが窺い知れる。地位や名誉、常識に縛られない彼らの自由な発想は、疑似科学、あるいは似非科学との謗りを受けがちであったが、コクトーは共感をこめて、それを「左翼の科学」«science de gauche»(1954/10/15)と名付けている。彼は無名の学徒たちの著書に自ら序文を寄せることで「左翼の科学」をバックアップしようとしたのだった。ミシュルの著作以外にも、宗教史家やエジプト学者、葡萄栽培家などの多彩な顔を併せ持つルネ・ベルトランやカバラや占星術に通じていたジャン＝ルネ・ルグラン、SF作家でUFO研究家でもあったジミー・ギューなどが、その恩恵に与っている³³⁾。

コクトーが言う「左翼の科学」とは、前衛考古学やUFO研究(ユーフォロジー)をも包含するものであった。アカデミックで保守的、公的な科学が敬遠してきた分野に敢然と斬り込む「左翼の科学」の実践者は、当然、フランス国外にも存在した。コクトーは日記の中で、「現代の重要な二人の科学者」として、ドイツの物理学者ブルクハルト・ハイム(1925-2001)とイギリスの技術者ジョージ・デラワー(1904-1969)の名前を挙げ、「ハイムはデラワーよりも名前が知られているが、胡散臭く見られている点では遜色がない。学者たちは、恐らく彼をいい加減な人物と見ていることだろう。というのも、悪用されることを恐れて、彼は自分の発明の公表を拒否しているからだ」と述べた上で、両者の研究内容について、ラジオニクス療法に新境地を拓いた「デラワーは、血液の記憶を撮影することに成功し」、ハイムは「私たちが地面に繋ぎ止めている磁力を消し去る」ことに腐心している旨を紹介している(1958/10/2)。ともに耳目を驚かすような研究内容だが、とりわけ、上述した「反重力」や特殊な意味合いがこめられた「落下」の実現にも繋がるものとして、コクトーがハイムの試みに強い関心を寄せていたことは、他日の日記に見られる「科学は間違った道を歩みつつある。重力に逆らって無理やり身を引き剥がすことにこだわり、落下によって重力を克服しようとはしない。ブルクハルト・ハイムはこの方法を理解した唯一の人物であるように思える」(1962/8/20)という記述からも窺える。

二人の異能の学者の研究内容もさることながら、それらに言及した日記の記述に関して見落としてはならないのが、彼らがともに「胡散臭い」（«suspect»な）存在として学者たちから信用されていなかったことが指摘されている点である。これは「左翼の科学」に手を染めた者たちの、いわば宿命であった。ミシェル然り、ナチスの影が付きまとうヘルビガー然り、熱狂的な信奉者を生んだヴェリコフスキーも例外ではなかった。そして、こうした評価は、実は彼らを支持したコクトー自身にも、そのままあてはまるものであった。晩年のコクトーの日記には、多岐にわたる分野でこれまでに発表してきた自らの作品の不遇を嘆く言葉が散見するが、その中でも特に注目されるのが、ヴァレリーやマルローやカミュばかりが文学研究者から高く評価される傾向を指摘した上で綴られた「あの知識人たちの世界では、私が引き合いに出されることは決してない」（1958/11/22）という一文である。

主文の「私が引き合いに出されることは決してない」«jamais on ne me cite»の「私が」«me»をコクトーとエメ・ミシェルを指す「私たちが」«nous»に置き換えれば、先に引用した両者の絆を物語る日記（1958/7/23）の中の言葉そのものとなる点に注意したい。コクトーが自らの文学・芸術の置かれた立場を「左翼の科学」のそれと同一視していたことが察せられる興味深い暗合だが、加えて注目されるのが、「あの知識人たちの世界」«cet univers des intellectuels」という言葉である。晩年のコクトーが現代社会の病巣として何にも増して厳しく糾弾したのが、「知識人」たちが招いた「知性偏重主義」«intellectualisme»だった³⁴⁾。日本語に訳しにくいこの言葉は、「孤独」«solitude»とともに、『定過去』に頻出する単語のひとつに数えられる。それらが用いられる時、不機嫌に放たれる毒舌と行間から滲み出る諦観の念が、当時のコクトーの心情を生々しく浮かび上がらせ、公刊を想定して書かれた『定過去』の日記としての素顔が、図らずも露呈されることになる。

コクトーが「知性偏重主義」にアカデミックで保守的、公的な性格を認めていたことは論を俟たないだろう。それに抗する彼の文学と芸術は、さしずめ「左翼の文学」、「左翼の芸術」と形容できるかもしれない。コクトーが「左翼の科学」の実践者たちに共鳴し、労を惜しまず彼らをバックアップしたのは、単に物好きが高じたわけでも、功成り名遂げた好々爺の親心がそうさせたわけでもなく、彼らを「知性偏重主義」に対抗するための心強い同志として見ていたからにほかならない。そして、コクトーが共感を以て自身の姿を重ね合わせたのは、「左翼の科学」の担い手たちだけではなかった。「左翼の科学」が扱う事象そのものにも、彼は自己を投影していたのである。

最晩年の日記の中で、コクトーはしばしば自嘲気味に、自らの作品を、そして時には自分自身を、ONI (objet non identifié)「未確認物体」と呼んでいる。UFOのフランス語表記OVNI (objet volant non identifié)「未確認飛行物体」が言葉として定着するのは1970年代に入ってからのものであり、コクトーの生前には「空飛ぶ円盤」を指す略称としてONIが使われていたものと考えられる。社会的な権威を有するアカデミックな科学者たちから「未確認」(non identifié)なもの

として顧みられなかった UFO にコクトーが自らを重ね合わせていた点が興味深い。彼にとって UFO は、自らの時間観・世界観の正当性を裏付けるためにも真摯に identifier すべき課題であったが、同時に、その芸術や思想が正当に identifier されていない彼自身の孤独を映し出す鏡のような存在でもあったと言えるだろう。

注

※本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究：課題番号26580061）の成果報告の一環をなすものである。

- 1) Jean Cocteau, *Le Passé défini I-VIII*, Gallimard, 1983-2013. 本文及び注の中に補記された括弧付きの年月日（年／月／日）は、すべてこの日記集の日付である。巻号及び頁数は割愛した。なお、訳者が示されていない本稿中の引用文は、すべて拙訳によるものである。日記集の第5巻に序文を寄せた編者のひとり、その中で、「コクトー自身の勤めに従って、場合によっては、奇妙で必ずしも共感できるものではない苦悩を滲ませたあの肖像に手を加えない範囲で、くどくどと述べ立てられる不平や自慢話が度を越したものににならないよう、いくつかの箇所に鉄を入れた」ことを打ち明けている。Cf. Pierre Caizergues, «Préface» in *Le Passé défini V*, p.10.
- 2) 日記集の題名として、コクトーは当初、「胸襟を開いて」«à cœur ouvert»（1961/1/12）という言葉候補に挙げていた。同時代の知識人に幻滅を感じていた彼は、未来の心ある読者に想いを寄せながら日々の想念を書き綴ったのだった。
- 3) 「四大文明」は清朝末期の思想家で政治活動をも行った梁啓超（1873-1929）が提唱した概念であり、通用するのは、日本や中国、韓国といった東アジアの国々に限られるという。昨今の考古学の調査・研究を通じて、「四大文明」が発生した地域以外でも、同等の文明の存在が少なからず確認されている。この言葉は、あくまでも象徴的な意味合いで捉えるべき性格のものであると言える。
- 4) 小学館『デジタル大辞泉』の定義に従った。
- 5) out of place artifacts の頭文字等から成る OOPARTS は、アメリカの動物学者で UFO をはじめとする超常現象の研究家としても知られたアイヴァン・サンダーソン（1911-1973）の造語だが、数々の「オーパーツ」の存在を広く世に知らしめた最大の功労者は、事実の歪曲や捏造が指摘されるなど、さまざまな毀誉褒貶にさらされたものの、日本も含めて世界的なベストセラーとなった『神々の指紋』*Fingerprints of the Gods*（1995）であると言ってよい。作者のグラハム・ハンコック（1950-）は、奇しくもサンダーソンと同郷のエディンバラ（スコットランド）の出身であった。
- 6) Cf. 斎藤守弘『神々の発見—超歴史学ノート—』、講談社文庫、1997年、18-49頁。前注で言及したグラハム・ハンコックの『神々の指紋』をはじめとして、「オーパーツ」を題材に扱った著作は少なくないが、その中でもひと際異彩を放っているのが、日本の知られざる「オーパーツ」をも数多く取り上げ、世界の「オーパーツ」との接点を探りながら独自の説を導き出した同書であろう。刊行された時期とそのタイトルから見て、『神々の指紋』を意識して上梓されたものと推察されるが、巻末に解説を寄せた作家の高橋克彦の言葉を借りて言えば、「ハンコックとは違って、この本は遥かに興奮を誘う新説で埋められている。」Cf. 同書、454頁。「ピリ・レイスの地図」についても、作者が現地で確認した基礎的な情報を基に独自の推論が繰り広げられており、一読に値する。ちなみに、「ピリ・レイスの地図」に描かれた南極大陸とされる陸地が南米大陸の不正確な描写に過ぎないことを主張する識者も少なくない。
- 7) フランス語訳（*Les Cartes des anciens rois de la Mer*）が出版されたのは1981年のことである。出版したのは、奇しくもエディシオン・デュ・ロシェ（Editions du Rocher）だった。モナコに拠点を置くこの出版社は、18）

- で後述する富豪夫人フランシーヌ・ヴェスヴェレールの出資を得て設立され、コクトーの著作の刊行を当初の主な目的としていた。
- 8) コクトーは他日の日記の中で、1783年に熱気球で人類初の有人飛行に成功したモンゴルフィエ兄弟のエピソードに言及しながら、「モンゴルフィエ夫人のスカートから錯誤が始まった。反重力によって両足の靴底が地表を離れるようにすることではなく、自分を無理やり地表から引き離すことにばかり、人は努力を傾けている」（1962/6/14）と述べ、重力に逆らって飛翔することの不合理を説いている。
 - 9) インカ人たちの乗り物が「黄金の大杯」*«vaste coupe d'or»* という奇異な言葉で表現されているが、これはギリシャ神話の英雄ヘラクレスの「十二の功業」のひとつである「ゲリュオンの牛」のエピソードにも登場する太陽神ヘリオスの「黄金の大杯」、つまり、ゲリュオンが飼っていた牛を奪取するべく、この三頭三身の怪物が住む島へと向かうヘラクレスに対して、その蛮勇ぶりに魅せられた太陽神ヘリオスが貸与した黄金の船を念頭に置いた形容であると考えられる。
 - 10) 「ピリ・レイスの地図」と並んで特によく知られる「オーパーツ」に、『神々の指紋』の巻頭でも取り上げられた「コロンビアの黄金ジェット（黄金シャトル）」がある。5世紀から8世紀にかけて栄えたシヌエ文化の遺構とされるコロンビアの古代遺跡から発掘された約5センチ四方の黄金細工であり、スペースシャトルそっくりの形状をしている。その主翼や水平尾翼、垂直尾翼が航空力学的に正しく配置されたものであることが、ニューヨークの航空宇宙研究所での風洞実験によって証明されたという。Cf. クラウス・ドナ、ラインハルト・ハベック『オーパーツ大全―失われた文明の遺産―』、ブシナ岩島史枝訳、学習研究社、2005年、85-86頁。この「オーパーツ」に関しては、斎藤守弘が『神々の発見―超歴史学ノート―』の中で類書には見られない大胆な仮説を提唱しているが、もちろん、「鳥を様式化したもの」、あるいはトビウオやナマズなどの魚を模したものとする穏当な解釈を唱える向きもある。Cf. 羽仁礼『超常現象大事典』、成甲書房、2001年、152頁。
 - 11) 超古代文明が引き起こした核戦争のさまが描かれているとして、しばしば話題に上るのが、最古のヴェーダである『リグ・ヴェーダ』と古代インドの叙事詩でヒンドゥー教の聖典にも数えられる『マハーバーラタ』と『ラーマヤナ』である。後者の二大叙事詩は、厳密に言えば、スメリティ（聖伝）に分類され、ヴェーダとは異なるが、コクトーがこれらにも通じていたことは、例えば、日記に書き留められた『「ラーマヤナ」―さまざまなインドの空飛ぶ機械の描写』（1962/6/5）という短い言葉からも察せられる。
 - 12) 2015年の1月にムンバイで開催された第102回インド科学会議において、7000年前の古代インドに、前後左右に自由に移動することができ、惑星間航行も可能な飛行機が存在したことを論じる研究発表が行われたが、その発表の是非をめぐって、事前にNASAの科学者が疑似科学的な内容に警鐘を鳴らすなど、世界的な論争が繰り広げられた。
 - 13) Cf. 『超常現象大事典』、166頁。こうした「ヴィマナ」水銀エンジン説がDileep Kumar Kanjilal というインドの学者によって1985年に唱えられたこと、そしてそれを立証する記述が11世紀に書かれた建築書 *Samarangana Sutradhara* の中に見出せることを主張しているのは、アメリカの作家デヴィッド・ハッチャー・チルドレス（1957-）である。彼がオーナーを務める出版社は、前衛考古学や超常現象等のオカルト的な話題に関する書籍を専門に扱っている。日本でいえば、学研プラス（旧学習研究社）が発刊している月刊誌『ムー』などを思い浮かべればよいのかもしれない。
 - 14) オカルト的な知識がふんだんに盛り込まれた同日の日記（1962/6/9）には、「ヴァチカンの法王庁は、あるスペイン人のイエズス会士が考案した装置の設計図を所有している。それは空を飛ぶことができる装置だったが、その存在は隠蔽され、二度と日の目を見ることはなかった」という記述も見られ、「死以外のやり方で天に昇ることは、カトリック教会にとって、容認することのできない冒瀆だった。そして彼らの謬見の証左でもあったのだ」と結ばれている。さらには、情報源がコクトー所縁の出版社エディシオン・デュ・ロシュの創業者でもあったジャーナリストのシャルル・オランゴ（1913-1974）であることを予め断った上で、間もなくフランスで「反

重力」を可能にする発明がなされることを告げる驚愕すべき記述までもが見受けられる。もちろん、現時点に至るまでそのような事実は一切確認されていない。

- 15) アトランティス伝説の流布に貢献した人物のひとりに、20世紀最大の予言者と呼ばれたエドガー・ケイシー（1877-1945）がいる。彼は、自らを催眠状態に導くことで高次の意識（超意識）に到達し、そこから高次の情報を得ていたという。Cf. NPO法人「日本エドガー・ケイシー・センター」Webサイト（<http://www.edgarcayce.jp/>）。こうした「リーディング」と呼ばれる手法を用いてアトランティスの興亡をも霊視したとされるケイシーの能力を、コクトーは肯定的に捉えていた。彼は日記の中で「1945年に死去したエドガー・ケイシーにとって、時間は折り目がなく広がった状態で存在していた。催眠状態の中で、彼は前もってすべてを知ることができた。しかし、怪物やいかさま師に見られることを恐れて、彼は自身の特殊能力と闘っていた」（1958/11/7）と述べ、ケイシーがそうした苦悩から解放されることになる自らの死の日付を予言していたというエピソードにも触れている。予言者といえば、コクトーの日記には、20世紀末に多くの日本人を不安に陥れた五島勉の『ノストラダムスの大予言』（1973）で知られるミシェル・ノストラダムス（1503-1566）に関する言及も見受けられる。「ノストラダムスが私たちに告げる黄金時代を体験するには年を取り過ぎた」（1962/1/16）という言葉からは、彼がフランス・ルネサンス期の大予言者の主著『ノストラダムス予言集（諸世紀）』*Les Prophéties de M. Michel Nostradamus*（1555）を読んでいたことが窺い知れる。
- 16) アトランティス人が赤色人種であったとする説は、「アトランティス学の父」と称されるアメリカの政治家イグネイシャス・ロヨラ・ドネリー（1831-1901）の学説を継承し、フランスにおけるアトランティス・ブームの火付け役のひとりとなった美術家ミシェル・マンズィ（1849-1915）の著作『アトランティス読本』*Le Livre de l'Atlantide*（1922）の中でも、すでに唱えられていた。Cf. Michel Manzi, *Le Livre de l'Atlantide*, Maurice Glomeau, 1922, pp.48-52.
- 17) Cf. Denis Saurat, *L'Atlantide et le règne des géants*, Editions Denoël, 1954.
- 18) この時期のコクトーは、地理的にも精神的にもパリの文壇から距離を置くようになり、コート・ダジュールの隠れ家的な趣がある景勝地サン＝ジャン＝カップ＝フェラの岬の突端に位置するサント＝ソスピール荘に暮らす時間が長くなる。別荘の主は、晩年の詩人を物心両面で支えた美貌の富豪夫人、フランシーヌ・ヴェスヴェレール（1916-2003）であった。
- 19) ソーラはこうした持論を、アトランティス研究の二冊目の著書『巨人たちの宗教と昆虫たちの文明』（1955）を通じて世に問うことになる。Cf. Denis Saurat, *La religion des géants et la civilisation des insectes*, Editions Denoël, 1955.
- 20) 同日の日記の記述からは、コクトーが、オランダのエントレヒト大学超心理学研究センターの所長を務めていたミシェル・ポバール（Michel Pobers）の教示を得てハイゼンベルクの学説への理解を深めていったことが察せられる。芸術家たちに愛されたコート・ダジュールを代表する「鷹の巣村」サン＝ポール＝ド＝ヴァンスで、1954年に超心理学の国際会議が開催されているが、それをきっかけに、コクトーは会議の主宰者であったポバールと面識を持つに至ったと見られる。
- 21) 晩年にコクトーが温めていた特異な時間観は、評論集『知られざる者の日記』*Journal d'un inconnu*（1953）の「距離について」«Des distances»の章で説かれているほか、日記の中でも頻繁に言及されている。それによると、時間は遠近法によって引き起こされるひとつの現象であり、空間と一体をなしているため、遠い世界、つまり相対的に小さな世界では、空間のスケールに合わせて時間が凝縮されることになるという。何とも晦渋な考え方だが、コクトー自身、人間の知覚を欺く「時間の遠近法」のメカニズムをうまく説明できないジレンマに囚われていたらしく、自らに科学的な論理を展開する知性が欠如していることを繰り返し嘆いている。Cf. 拙論「時間の遠近法—コクトー作品における異界訪問譚をめぐって—」、*GALLIA*, No.50、大阪大学フランス語フランス文学会、2011年、191-200頁。

- 22) 言葉の定義は、いずれも「デジタル大辞泉」に依った。地質学、いや科学の分野において、伝統的に、「斉一説（uniformitarisme）」は正統、「天変地異説（catastrophisme）」は異端の扱いを受けてきたと言ってよい。後者は「激変論（cataclysm）」とも呼ばれ、コクトーはこの言葉を好んで用いている。
- 23) Cf. ジョスリン・ゴドウィン『北極の神秘主義—極地の神話・科学・象徴性、ナチズムをめぐって—』、松田和也訳、工作舎、1995年、260-278頁。同書では、激変論者（天変地異論者）の系譜が、オカルト的な性格に偏らないよう抑制を効かせた筆致で、簡明にまとめられている。斉一論者の系譜にも一章が割かれており、一読に値する。
- 24) イマヌエル・ヴェリコフスキー『衝突する宇宙』、鈴木敬信訳、法政大学出版局、1986年（初版1951年）、xv頁（鈴木敬信「本書をはじめて読む人のために」）。同書が刊行の翌年に翻訳されて日本に紹介されている事実からも、その反響の大きさが窺い知れる。翻訳を手がけた天文学者の鈴木敬信が邦訳の再刊にあたって書き下ろした「再刊のことば」がふるっている。「筆者がたどりついた結論はたしかにおかしい。天文力学を知っている人ならば、こんな結論はださなかったであろう。筆者が天文学を知らないことは、書中あちこちにみられる。筆者の結論はさることながら、私はその結論をだすのにもちいたいろいろの資料の豊富さに目を見はる。私は、この本によって、世界各地の民話伝説に異常なまでの類似点があることを知った。筆者はこの類似点を追求して、天文学的には受け入れられない結論にたどりついた。この類似点は、べつの方面から解釈できないものであろうか。その意味では、この本は一つの資料源ともいえる。本書ならびに訳者の悪口をいうまえに、このような資料源が日本で刊行されていたかどうか、それを教えていただきたい。もしないのならば、本書はその点で貴重な存在となる。あえて再刊するゆえんである。」Cf. 同書、xiv頁（鈴木敬信「再刊のことば」）。鈴木は同書の改訂にあたって「改版への序」という文章も寄せており、その中で「著者のだした結論を認めない人が多い。わたしもその一人である」と明言している。「本書をはじめて読む人のために」の中には、ヴェリコフスキーの学説に対する天文学者としての具体的な反論が展開されている件も見受けられるが、こうした異例とも言える一連の訳者のコメントは、『衝突する宇宙』という著作の特異性を如実に物語っている。
- 25) Cf. コリン・ウィルソン、ダモン・ウィルソン『世界不思議百科』、関口篤訳、青土社、2007年、100-103頁。
- 26) ジョスリン・ゴドウィン『北極の神秘主義—極地の神話・科学・象徴性、ナチズムをめぐって—』、274頁。
- 27) 『衝突する宇宙』は二部構成の本文（第1部「金星」、第2部「火星」）とそれを挟むプロローグとエピローグとで構成されているが、ここでコクトーが言及しているのは、「多くの問題に当面して」と題されたエピローグの終盤、邦訳（鈴木敬信訳）で言えば、436-437頁の記述である。彼が同書を読了したのは、この日記が書かれた時期であった可能性が高い。
- 28) ミシェルから贈られた彼の著作に感銘を受けたコクトーが、返礼として近著である『知られざる者の日記』を贈呈したことがきっかけとなり、意気投合した二人は、1954年9月14日に、コクトーが滞在していたサン＝ジャン＝カップ＝フェラのサント＝ソスピール荘において初対面を果たしている。ミシェルはその時の印象を、「1954年に初めてコクトーと会った時、彼は瀕死の病人だった。心筋梗塞で寝たきりになっていたのだ。危機的な状況を脱することができるかどうか、彼にもわからなかった。私の心を打ったのは、彼がそのことを少しも気にかけていないことだった。彼の関心は、当時のヨーロッパに押し寄せていた空飛ぶ円盤という波の背後に何があるのか、それを知ることにのみ注がれていた」と述べている。Cf. Aimé Michel, «Qu'est-ce que le normal ? — Hommage à Jean Cocteau explorateur de l'esprit —», *Arts-spectacles* n° 802, 1960; reproduit in «Annexes» du *Passé défini VII*, Gallimard, 2012, p.586.
- 29) 厳密に言えば、同書が1956年に再刊され、新たに英語訳（*The Truth About Flying Saucers*）も刊行された際に、コクトーの序文が添えられた。Cf. Pierre Lagrange, *Jean Cocteau, ufologue*, «Humanités spatiales», <http://humanites-spatiales.fr/jean-cocteau-ufologue/>, le 25, juin, 2015.
- 30) Cf. *Ibid.*

- 31) Aimé Michel, *Mystérieux Objets célestes*, Arthaud, 1958, pp.55-56.
- 32) Cf. Pierre Lagrange, *Jean Cocteau, ufologue*. 同論考によれば、「orthoténie」の根拠となったUFO目撃地点の計測に不備があったことがのちに判明し、現在では、UFO研究者の間ですら、ミシェルの学説は否定的に受け止められているという。
- 33) Cf. René Bertrand, *Sagesse et chimères*, Editions Bernard Grasset, 1953. Jean-René Legrand, *Méditations cabalistiques sur des symboles traditionnels*, Editions des Champs-Élysées, 1955. Jimmy Guieu, *Black-out sur les soucoupes volantes*, Fleuve noir, 1956.
- 34) 例えば、「ヴァレリーの『我がファウスト』の大きな成功は、ジロドゥーの幸運が何を準備したのか、それを決定的に示している。つまり、知性偏重主義という病だ」(1962/4/21)という言葉に見られるように、コクトーは日記の中で、「知性偏重主義」を助長してきた主な作家として、ポール・ヴァレリー(1871-1945)とジャン・ジロドゥー(1882-1944)の名前を挙げている。映画監督でしばしば槍玉に挙げられたのは、アラン・レネ(1922-2014)だった。「無教養な知識人の時代」という言葉に続けて、1962年に初演されたヴァレリーの戯曲『我がファウスト』*Mon Faust* (1946)とアニエス・ヴァルダ(1928-)の映画『5時から6時までのクレオ』*Cléo de 5 à 7* (1962)とともに、彼の『去年マリエンバードで』*L'Année dernière à Marienbad* (1961)が挙げられている(1962/4/27)。